

竹久夢二と彦乃

別府療養の地

矢 島 嗣 久

竹久夢二は明治一十七年生まれ、昭和九年に死去する。岡山県生まれ。早稲田実業の出身。画壇に交わることはなかったが、「夢二式」と呼ばれる独特の美人画で世の喝采を浴びた。千点以上に及ぶ肉筆画とともに、「どんたく」等の絵入り詩集がある。本の装丁、楽譜の表紙、絵はがきやポスターなど、様々な形でデザインの才を発揮した点でも注目される。

一 夢二の生い立ち

竹下夢二は明治一十七年（一八八四）九月一六日、岡山県邑久郡本庄村に生まれる。本名は茂次郎^{もじろう}。父・菊蔵（三二歳）は造り酒屋を営む。母は也須能（やすの、二八歳）。次男として生まれるが、兄が前年に亡くなっていたため、事実上の長男として育てられる。六歳年上の姉・松香と六歳年下の妹・栄がいた。名字の「竹久」は、以前「武久」であったが、その後「竹

久」に改められたという。

現在、生家は「夢二郷土美術館分館」となっている。

明治三三年（二八九九）四月、茂次郎一六歳、神戸中学校に入学。一二月、家事都合により中退して帰郷する。翌明治三三年二月、茂次郎一七歳、一家で福岡県遠賀郡八幡村大字枝光へ転居する。父は八幡製鉄所の建設現場で働き、夢二も製図工として働いた。八幡製鉄所が操業を開始した明治三四年七月、茂次郎、一八歳は家出して上京し、苦学する。

翌明治三五年九月、茂次郎一九歳、早稲田実業学校に入学した。

明治三八年（一九〇五）、茂次郎二二歳、「中学世界」にコマ絵「筒井筒」が一等入選し、初めて「夢二」と署名する。夢二は本名の茂次郎が「モーさん」と呼ばれるので好きでなかったらしい。早稲田実業学校専攻科を中退する。

二 正妻たまき

茂次郎（夢二）は生活のために絵ハガキ制作を始める。夢二が二三歳のとき、早稲田鶴巻町で絵ハガキ店を開いた未亡人、岸たまき（他万喜、当時二四歳）と出会い、翌年、明治四〇年（一九〇七）一月に二人が結ばれる。

岸たまきは明治一五年（一八八二）七月二十八日、石川県金沢の生まれ。日本画家の堀内喜一と結婚するが、夫が三三歳で急死したため、東京で絵はがき屋「つるや」を開く。開店後まもなく夢二と出会い、一年後の明治四〇年一月に結婚、眼の大きな女性で、夢二式美人画の原型となった女性である。夢二が正式に結婚したのは彼女だけである。前夫との間に二児があった。

明治四一年（一九〇八）二月、夢二とたまきに長男虹之介こうのすけが生まれた。翌年の明治四二年五月、夢二がたまきと協議離婚する。

明治四二年、最初の著作「夢二画集 春の巻」を刊行する。ベストセラーとなり、夢二の抒情画は人気を博す。生涯に画集、詩集、小説等六〇の著作がある。

明治四三年一月、再びたまきと同居する。

明治四四年五月、次男不二彦が生まれた。

大正二年



宵待草、セノ才楽譜

（一九一三）十一月、絵入り少年詩集「どんたく」を刊行し、「宵待草」を現在の詩形で発表する。「どんたく」とは日曜日や休日、休業を表す言葉であり、「博多どんたく」が有名である。

待てど 暮らせど 来ぬ人を

宵待草の やるせなさ

今宵は月も出ぬそうな

夢二は大正四年（一九一五）に、たまきと画学生東郷鉄春（後の東郷青児）との仲を疑い、富山県の海岸で夢二がたまきの腕を刺すことよって破局を迎えた。のち、岸たまきが昭和二〇年（一九四五）七月九日に死去する。享年六四歳。現在、別府市鉄輪御幸の「鬼山ホテル」の一階ロビーに別府の山並みと女性を描いた東郷青児の絵が展示されている。なお大正五年（一九一六）二月、三男草二が生まれている。セノ才楽譜は作曲や訳詩で西洋音楽の復旧に努めた妹尾幸陽が大正五年から昭和二年（一九二七）にかけて国内外の名曲を集め出版した一〇〇一曲に及ぶ楽譜集である。夢二はそのうち二七〇点あまりの表紙絵を手がけた。「お江戸日本橋」

を手始めに、夢二作詩の「宵待草」や、「埴生の宿」、「君よ知るや南の国」などもその一つである。

夢二は柳原白蓮（本名燐子）の詩集、大正四年三月刊行の第一歌集「踏絵」及び大正八年三月刊行の「幻の華」の装丁を担当している。

白蓮は大正六年（一九一七）の暮から大正一〇年（一九二二）の一〇月迄、別府の伊藤別荘（のちの赤銅御殿）に住んでいた。竹久ミナミさんは長男・虹之介の娘。都さんは次男・不二彦の妻にあたる。

三 笠井彦乃

笠井彦乃、明治二九年（一八九六）三月二十九日生まれ、紙問屋の長女として東京日本橋に生まれる。



港屋絵草紙店

大正三年、夢二、三一歳。東京日本橋呉服町に夢二デザインの千代紙や和装小物を商う「港屋」を開店。一〇月、この頃、

夢二が笠井彦乃と出会い、恋に落ちる。当時、彦乃は一八歳。

彦乃は夢二との交際を激しく

父に反対されるが、大正六年（一九一七）六月、京都において、二人は幸せな時期を過ごす。翌大正七年八月から九月、夢二（三五歳）は二男不二彦を伴い、九州、長崎への旅行の際、後を追ってきた彦乃（二三歳）と別府流川の日名子旅館に滞在した。夢二は病気の彦乃を預け、長崎の永見徳太郎を訪ねて出発した。長崎旅行の帰途、別府の千代町にあった中田産婦人科医院で肺結核の療養をしていた彦乃を看病する。しかし、彦乃は父親に東京へ連れ戻され、お茶の水順天堂医院に入院した。彦乃は大正九年（一九二〇）一月一六日、二五歳の若さで死去する。夢二、三七歳、一歳年下であった彼女こそ、夢二がその生涯で最も愛した女性といわれている。

夢二は彦乃が別府で入院したため、長崎での滞在を早めて別府に戻り彦乃を看病した。その際、別府で個展を開いたと伝えられているので、現在、別府や大分に夢二のいくつつかの



竹久夢二と笠井彦乃

作品が愛好家によって所蔵されていると思われる。

また、夢二は二年後の大正九年に作品「長崎十二景」を發表している。

夢二の自伝小説「出版」には、彦乃がモデルとなって登場している。また、夢二の代表的な挿絵入り歌集「山へよする」の中には、別府における彦乃を詠んだらしいものが幾首かみられる。夢二は彦乃のことを「山路しの」から「しの」又は「山」といい、自分のことを「川」という符丁ふちようで手紙を交わしていた。

「摩訶不思議 噂の生みし 我といふ

魔性の女 いくたりかすむ

そのかみの 少女のごとき はじらいを

十日見ざれば 眼に見するひと

旅の夜に 氷をわると 吾があれば

遠方にして 船の笛鳴る

つつましく かしこき命 いたはりて

好き日見むと 手をとりて泣く」

中田産婦人科医院は大正四年（一九一五）に開業。院長の中田善之介は、東大出の名医として知られた。善之介は弧川こせ川という俳号をもつ俳人でもあった。医院は洋風の木造二階建て、戦後、吉井医院となったが、老朽化が激しく、平成四年（一九九二）夏、人手に渡り解体され、現在は駐車場となっている。

その跡地には平成二四年（二〇〇二）三月、当時末広郵便局長であった河村建一氏によって「竹久夢二、彦乃療養の跡」の石碑が建てられている。

四 佐々木お葉

お葉は明治三七年（一九〇四）三月二一日に生まれた。本名は佐々木カネヨ（カ子ヨ）。お葉は夢二がつけた呼び名である。秋田県生まれ。一二歳の頃から画家のモデルを始める。東京美術学校のモデルであった。後に藤島武二や伊藤晴雨のモデルもつとめるようになる。大正八年（一九一九）、夢二と出会う。一六歳のモデルお葉を友人が夢二の処へ連れてきたという。大正二〇年七月、夢二はモデルのお葉と渋谷に所帯をもつ。代表作、猫を抱いた「黒船屋」を始め、夢二式美人の源泉となった。「黒船屋」はお葉をモデルに描かれたも

のである。また、夢二は別れた妻、たまき（他万喜）に開かせた店「港屋」のこゝとを「黒船屋」と記しているので、「黒船屋」に描かれた女性性は他万喜のイメージをもつ可能性もある。



竹久夢二と佐々木お葉

夢二がお葉とは一児をもうけるが、夭折する。大正一四年にお葉は自殺を図り、半年後に夢二と別離する。晩年は医師と結婚し、昭和五五年（一九八〇）一〇月二四日に死去した。享年七七歳。

大正八年、飯島という掛け軸の表具師が夢二を訪ねてきた。飯島は夢二の作品「黒船屋」を自分の恋人と呼び、終生手放さなかった。そして九〇歳を越えるまで、現役の表具師の仕事をまっとうした。

現在、「黒船屋」の所蔵先は、「竹久夢二伊香保記念館」（群馬県北群馬郡伊香保町）である。

夢二は、大正九年に絹本着色「逢状」を発表する。逢状とは、

客からなじみの芸者のもとに届けられた呼び出し状のことをいう。この絵も岡山の「夢二郷土美術館」の所蔵品である。

五 晩年の夢二

大正一二年（一九二三）夢二、四〇歳、楽しい挿絵のみで、まったく文章を伴わない「どんたく絵本」を発行している。夢二は友人の恩地孝四郎らと、ポスター・広告・看板などデザイン全般を請け負う工房「どんたく図案社」の計画を立ち上げ、実現寸前までこぎつけるが関東大震災（大正一二年九月一日）によつてあえなく挫折した。

翌大正一三年、夢二、四一歳、「婦人グラフ」に表紙や口絵の掲載をはじめめる。昭和二年（一九二七）まで続く。当時の夢二人気にあやかつて、これらの雑誌は飛ぶように売れた。

同年一二月、松沢村（現在の東京都世田谷区松原）にアトリエ付き新居「少年山荘」が完成し、転居する。

昭和六年（一九三一）、夢二、四八歳、榛名山美術研究所建設（群馬県北群馬郡伊香保町）の準備を進める。また、外遊を決意する。二月、夢二の父菊蔵が、妹日下栄宅で死去した。

夢二は「川」、彦乃は「山」という符牒でお互いを呼び合っていた。同年三月、夢二が新宿三越で「渡米告別展」を開催。

二曲一隻、紙本着色「遠山に寄す」を出品する。絵の中の男女二人は立ち姿で寄り添っているが、男は彦乃を表している遠山を、女は夢二を表している川を、それぞれ別の方向を眺めている。現在、この絵は岡山の「夢二郷土美術館」に所蔵されている。

同年五月、夢二がアメリカに向かう。榛名山美術研究所も建設趣意書まで書いたが、夢二自身の外遊と病気により未完に終わった。

この年、「立田姫」が描かれる。二曲一隻、紙本着色。この絵は現在、岡山の「夢二郷土美術館」に所蔵されている。

小学館ウイクリー、週刊「日本の美をめぐる、NO8、竹久夢二」の記事を引用させてもらうと、『立田姫とは農作物の豊作をつかさどる秋の女神。自筆の画賛は、「昨年は米が高く常食にも事欠いたが、今年は米がやすく、どのみち農民は苦しむ」という意味の中国の詩人杜甫とほの漢詩の一節。首を一八〇度ひねって顔をこちらへ向ける奇妙な頭部といい、まるで実態を欠いた左腕の描写といい、夢二の人体表現はあまりにも大胆だ。最晩年の彼はこの女神像を表して、「自分の生涯における総くりの女、ミス・ニッポン」と語ったという。』

昭和七年（一九三〇）九月、夢二、四九歳、アメリカからヨーロッパへ渡る。ヨーロッパ各地を歩く。翌八年九月一八日、靖国丸で神戸に帰着。同年十一月、台湾に行くが、体調を悪化させ帰国し、病臥する。病気は彦乃と同じく肺結核という。昭和九年（一九三四）九月一日、長野県の富士見高原療養所で夢二が「ありがとう」を最後の言葉に永眠する。享年五一歳。

夢二が死ぬまですすことのない指輪に、名前を刻んでいたのは「しの」（彦乃の愛称）であった。

夢二は東京雑司ヶ谷ぞうしがや（東京都豊島区雑司が谷）墓地に埋葬される。ここには有島生馬いくまの筆になる「竹久夢二を埋む」の碑が建てられる。昭和三一年（一九五六）豊島区史跡に指定された。

六 竹久夢二美術館

「夢二郷土美術館」

岡山市の後楽園の近くに建築されている。昭和五九年（一九八四）に開館された美術館である。

所蔵作品は

「秋のいこい」(大正九年、昭和初期、二曲一双、絹本着色)、

「生ける屍」(大正中期、絹本着色)

その他木版画・挿絵・楽譜や書籍の装丁など、写真資料も豊富。

「逢状」(大正九年(一九二〇) 絹本着色。岡山、「夢二郷土美術館」。

術館」。

「立田姫」昭和六年(一九三二) 二曲一双、紙本着色。

「遠山に寄す」昭和六年(一九三二)、二曲一双、紙本着色。



立田姫



遠山に寄す

夢二のアトリエ付き住宅「少年山荘」

岡山の夢二生家のそばにある。これは東京の世田谷区から生誕九五年(昭和五〇年、一九七五年)を記念してこの地に移設、復元されたもの。かつて夢二が、お葉と暮らした家である。

「竹久夢二美術館」

東京都文京区弥生にある。

所蔵作品、

肉筆画「稲荷山」、

屏風「この夜ごころ」、

版画、デッサン、装丁本など。

「宵待草」セノオ楽譜、昭和九年(一九三四)、第六版、石版画。

「竹久夢生展覧会」ポスター、昭和六年(一九三二) 木版。

「水竹居」昭和八年(一九三三) 紙本着色。ヨーロッパ旅行中にベルリンで描かれたもの。

「海辺の別れ」、セノオ楽譜、大正一三年(一九二四)、石版。

「得度の日」「桜さく国 紅桃の巻」口絵、木版。

「山へよする、表紙、大正八年(一九一九)、木版。

「雖によする展覧会」、ポスター、昭和五年(一九三〇)、木版。

写真「岸 他万喜、明治四〇年(一九〇七) 頃」

「夢二と彦乃」湯湧温泉(石川)にて、大正六年

(一九一七)

「笠井彦乃」、京都東山病院にて、大正七年

「お葉(佐々木カ子ヨ)」、東京本郷喜久藤ホテルにて、

大正九年(一九二〇) 代初め。

河村コレクション

「長崎十二景」一、眼鏡橋、二、阿片窟。三、青い酒。四、浦上天主堂。大正九年（一九二〇）、水彩。

「切支丹波天連渡来之図」大正三年（一九一四）絹本着色。

「青春譜」昭和五年（一九三〇）油彩。

「旅」、昭和六年、二曲一双、紙本着色、パステル。

「竹久夢二伊香保記念館」

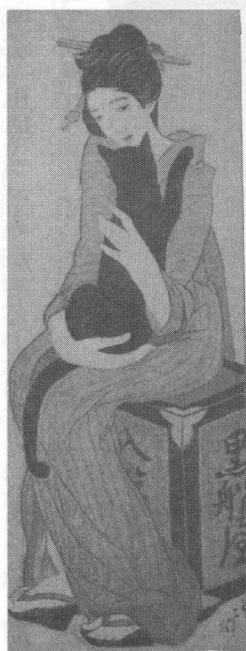
群馬県北群馬郡伊香保町にある。

所蔵作品

「黒船屋」大正八年（一九一九）、絹本着色。

「榛名山賦」「青山河」などの夢二作品のほか、大正期の人形

「破れた水車と破れた心」、明治四一年（一九〇八）、水彩。



黒船屋

「日光竹久夢二美術館」

場所、栃木県日光市柄倉。

肉筆画、約七〇点、版画、約六〇点。

平成二〇年（一九九八）一〇月二〇日、オープン。

「宮城県美術館」

場所、宮城県仙台市青葉区。

所蔵品、「港屋絵草紙店」大正三年（一九一四）、多色木版。

「ギャラリー夢二山荘」

最近、大分県由布市湯布院町川上にオープンした。夢二の作品を販売している。

七 追 記

別府市在住の河村建一氏は夢二が大正七年頃に別府で描いた「旅愁」の絵を所蔵されている。この絵は別府、大分が背景であるが、画面に描かれている人形遣いは当時、長崎の名物であった。夢二はその長崎でのイメージを別府で描いたものであろう。絵の実物は現在、大分県立図書館に寄託されている。

平成一八年（二〇〇六年）、大分合同新聞社から「竹久夢二の画集」が発行された。



旅愁

小学館ウィークリーブック「竹久夢二と大正ロマン」週刊「日本の美をめぐる」によれば『夢二の作品は保存状態や絵の人氣によつて価格はまちまちだが、最低でも五万円以上で取引されているようだ。雑誌全体がきれいに残っている場合は、十万円を下ることはない。夢二人氣は、今も健在である』と記されている。

八 謝 辞

取材に際し別府市末広町在住の河村建一氏、同南町在住の秋吉收氏、同大畑在住の川田康氏、茨城県日立市在住の森誠造氏の方々に御協力いただきました。紙上をお借りして厚く御礼申し上げます。

引用参考資料

- 「別府市誌」 別府市 昭和六〇年三月発行
別府歴史散歩 「泉都有情」 西日本新聞社 平成五年七月
「別府史談」第一〇号 平成八年 「別府を訪れた文化人たち」
大塚俊英著
「竹久夢二と大正ロマン」 週刊「日本の美をめぐる」小学館
平成一四年六月
「虚子庵椿 別府の俳人 秋吉良聞と方子」秋吉收著 平成
一九年九月
「要説・竹久夢二 その一 早年期の人物像」茨城文学三五
平成二〇年 森誠造著